

『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』

早稲田大学 文学学院 教授
益田 朋幸



研究の背景

ビザンティン美術史は、世界でも専門家のそれほど多くない分野です。英仏独語に加えて中世・現代ギリシア語、それに対象とする地域によってロシア語、セルビア語、イタリア語、トルコ語等が必要となります。フィールドワークが広範な地域に亘るだけでなく、北キプロス、コソヴォ(図1)、グルジア、エルサレム、シリアといった紛争地が含まれるのも厄介なところです。さらに、たとえばギリシアの研究者は、関係のよくない隣国トルコやマケドニアでの調査が困難である、といった政治的な制約も少なくありません。

ビザンティン美術の包括的な画像データベースは存在しませんので、聖堂壁画の研究をするためには現地調査が不可欠ですが、政治上中立的な日本人は有利な立場にあると言えます。その際科研費の助成があるのは、心強い限りでした。経済的に助かるだけでなく、調査許可の申請でも、日本の公的な助成のあることが大きく物を言うケースが少なくないのです。

研究の成果

本書『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』は200を超える聖堂の壁画(フレスコ・モザイク)について、図像学的な装飾プログラムを体系的に研究した、世界でも初めての成果です(実際に調査をした聖堂は1000をはるかに超えます)。中央にドームをもつビザンティン建築は、複雑な壁面構造をもち、その一面に壁画が描かれます(図2)。それぞれの主題(受胎告知、磔刑等)は意味をもっていますが、それがあ

の下に三次元空間に配列されたとき、一場面ではもち得ない複雑な神学的意義を獲得します。その実際を、「円環・相称性・中軸」という3つの原理によって分析しました。

今後の展望

1948年のO. Demusによる研究で、ビザンティン聖堂装飾の大枠が議論されて以来、細部の修正はともかく、全体を見渡す研究はなされてきませんでした。3つの原理によって、聖堂壁画の全体をひとつの有機体と見なす本書は、この分野の基本的研究となるものと思われます。今後は本書に示された理論的枠組みによって、これまで解明されていない装飾プログラムを解釈していくことが私の仕事となるでしょう。

本書は平成22~24年度科研費基盤研究(B)の成果による論文を中心に、平成25年度の助成によって単行本化したものです。しかしそれ以前の十数年間の科研費による成果が蓄積していることを強調したいと思います。人文系の研究では、十年、二十年単位で結果が出ることも少なくありません。その意味でも、科研費がなければ、本書はありませんでした。

関連する科研費

平成22-24年度 基盤研究(B)「バルカン半島中部における文化的多様性の歴史的研究」

平成25年度 研究成果公開促進費『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』



図1 コソヴォ、グラチャニツァ修道院、14世紀



図2 カップドキア(トルコ)、カラニルク・キリセ、11世紀